

### 交通の要所 亀山

亀山市は、市内を国道1号や名阪国道、高速道路などの主要道路が通り、また鉄道網も、亀山駅でJR東海とJR西日本に分かれ、各方面へ延びています。このように、亀山市は交通の要所として重要な役割を果たしていますが、古代も交通の要でした。

「古代三関」のひとつとして有名な「鈴鹿関」は、関宿のまちなみ付近にあったと想定されています。古代、天皇が崩御したときの政変に備えて、政権に歯向かう勢力が奈良の都から逃亡したり、逆に東国の勢力を味方につけて都に攻め入ったりするのを防ぐため、関を閉じました。これを「固関」と言います。つまり、鈴鹿関が都を守る砦のような役割を果たし、西国と東国との境目として、古代から重要視されていたのです。

ちなみに、鈴鹿関は昨年度までに発掘調査を終え、国史跡指定に向けて成果をまとめているところです。

### 古代の人や物の交流の中から生まれた歌

古代、都と地方を結ぶ交通網が整備されており、都と地方の連絡や物流は、馬を備えた「駅家」という拠点が支えました。関町古厩は、その駅家だったと言われています。当時、奈良の都からは加太峠越えで、この地に至りました。

この地域には、倭姫命が天照大神の安住の地を求めてやって来て、関町古厩で馬をつなぎ「都追美井」の井戸の水でのどを潤したとの伝説があります。旅人たちは、この辺りで休息し、都追美井の井戸で疲れを癒したようです。その都追美井にまつわる旅人の歌が万葉集に残されています。

鈴が音の 駅家のつつみ井の  
水を賜へな 妹が直手よ  
万葉集 詠み人知らず

(早馬のいる駅の都追美井のおいしい水を、あなたの手づから飲みたいなあ)

明るい雰囲気のある歌で、茶目っ気のある詠み人と、はにかみながらその横にたたずむ乙女の姿が目につかびます。



万葉集にも詠まれた歴史ある井戸跡の「都追美井」。明治42年に関神社に合祀された大井神社のご神体とも言われています。

### 鈴鹿川を詠んだ歌

川もまた、人の行き来や物流に欠かせないものです。鈴鹿川でも物を運搬するのに、川の流れも利用したことでしょう。旅人たちは鈴鹿川を見て、曲がりくねる川の流れに、旅に出るに至ったこれまでの自分の人生や、いくつもの峠や川を越え紆余曲折を経た自分たちの旅路に思いを重ねたことでしょう。

鈴鹿川にはたくさんの瀬があり、旅人たちは川を渡りつ戻りつ旅をしました。その様子から「八十瀬」というのが鈴鹿川の枕詞になりました。瀬が実際に八十あるのではなく、「たくさん」という意味です。

このような変化に富む鈴鹿川に触発され、多くの歌も生まれました。川もまた、歌をつむいだのです。

鈴鹿川 八十瀬渡りて誰がゆえか  
夜越えに越えむ 妻もあらなくに  
万葉集 詠み人知らず

(たくさんの瀬を渡らねばならない鈴鹿川を、誰が夜に越えるものでしょうか、妻もないのに)

時には旅に人生を重ねながら、多くの人々がそれぞれの想いを抱きつつ、峠を越え川を渡り行き来した亀山。人々の明るさも苦しさも飲み込んで、亀山は万葉の昔から多くの歌が生まれた地なのです。